

v o l u m e

113

MARCH  
2 0 1 0

HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

Yada 52-1, Suruga-ku, Shizuoka 422-8526 Japan

inside NEWS



春爛漫

はばたき橋から校舎を望む

●CONTENTS●

大学院看護学研究科に助産師養成課程を新設	1	「見極めよう！ 科学のウソ・ホント」セミナーを開催	4
新型インフルエンザの公開講演会を開催	1	研究助成採択	5
「ムセイオン静岡」を発行しました	2	教員人事、新規客員教授の紹介	6
“STUDIO”の始動に向けて	2	研究成果が学会誌の表紙に	6
産学連携		活躍する卒業生・修了生	7
中部公立3大学新技術説明会	3	受賞	10
ふじのくに 食と農 健康づくりフェア	3	教員の著書紹介	10
リアル政治学院国際交流委員長が表敬訪問	3	図書館だより	11
はばたき寄金からのお知らせ		環境イベント「Choice for the future」開催	13
モスクワ国立国際関係大学派遣短期交換留学生へ奨学支援金	4	2010年開学記念行事開催のお知らせ	13
第2回排尿障害モデル動物研究会の開催	4		

## 大学院看護学研究科に助産師養成課程を新設

大学院看護学研究科長／教授 式守 晴子  
同研究科助産学分野 教授 松岡 恵

大学院看護学研究科では、2010年4月、修士課程において助産師養成課程を開設します。静岡県における唯一の大学院修士課程における助産師養成課程となります。

### ●教育目標

- 1 女性と共にある専門職として、自律して妊産褥婦の継続ケアが行える助産師の育成
- 2 チーム医療の一員として、助産師独自の機能を果たせる人材の育成
- 3 新しい助産ケアの開発につながる研究的思考をもつ助産師の育成
- 4 助産分野のリーダーとして、助産師相互の教育に貢献できる人材の育成



### ●カリキュラム

2年間で、助産師国家試験受験資格に必要な授業科目（助産学特論・演習・実習）23単位、修了要件に必要な30単位と修士論文を作成し、最終試験に合格すると修士の学位が授与されます。

### ●入試

大学院看護学研究科では毎年2回（例年は9月と2月）に入試を行います。  
詳しくは、入試に関するHP、または看護学研究科のHPをご覧ください。

## 新型インフルエンザの現状と対策の公開講演会を開催

感染症管理対策委員長 短期大学部 教授 古賀 震

12月23日(木)に、本学と静岡市静岡医師会、同清水医師会、同薬剤師会、清水薬剤師会、同保健所は、静岡県医師会、同薬剤師会、同看護協会の後援のもと「新型インフルエンザの現状と対策の公開講演会」を開催し、一般、本学教職員、学生併せて110名の方のご出席をいただきました。

講演Ⅰでは、静岡市立静岡病院副院長の平田健雄氏から「地域における新型インフルエンザへの対策」のタイトルで、新型インフルエンザの静岡県における感染・流行の状況、合併症や治療に関すること、また小児・高齢者の発症等についてお話いただきました。

講演Ⅱでは、前国立感染症研究所血液・安全性研究部長の山口一成氏から「インフルエンザにどう向き合うかーワクチン、抗ウイルス薬、危機管理ー」のタイトルで、新型インフルエンザの世界や本邦での感染、流行の状況から治療（抗インフルエンザ薬、ワクチンの功罪を中心）、今後の新型インフルエンザ対策まで講演していただきました。

質疑応答、討論も活発に行われ、聴講者へ行ったアンケートには、「非常に役に立つ素晴らしい講演であった」との意見も見られました。聴講者は、新型インフルエンザについて、油断は禁物で、継続して感染拡大防止に努める認識を深める事が出来たと思います。

最後に、講演会に対しての皆様のご協力に、感染症管理対策委員長として厚くお礼を申し上げます。



平田健雄 氏



山口一成 氏



## 「ムセイオン静岡」を発行しました



静岡市の谷田丘陵地帯及びその周辺地域を「文化の丘」として多くの人々に認知していただき、興味を持って訪れていただくことを目的に、冊子「ムセイオン静岡」を発行しました。



冊子を披露する木苗学長(右)と立田教授(左) 下さい。

「ムセイオン」は古代ギリシャ語で博物館、美術館の意味です。「ムセイオン静岡」は、静岡県立大学、静岡県立美術館、静岡県立中央図書館、静岡県埋蔵文化財調査研究所、静岡県舞台芸術センター（SPAC）、グランシップ（静岡県コンベンションアーツセンター）による自主協働プログラムで、複数の文化施設が隣接する土地柄を生かして、若者や専門家が自由に行き交う文化の発信地を目指しています。

各種講座やセミナー、展示会などのイベントを企画していますので、是非ご参加

## “STUDIO”の始動に向けて

言語コミュニケーション研究センター長／国際関係学部教授 吉村紀子

2010年2月に、一般教育棟の3階に最先端の教育テクノロジーを備えた学習施設が完成し、4月の新学期より本格的に始動します。ニックネームは、STUDIO (stjũ:diou) (Specialized Technologies for Unifying Directed Interaction Opportunities)。STUDIOは、学生たちが国内外の情報や資料をオンラインで授業の中に活用し、自由自在に学習を展開・創作できる自由空間です。特に、対話型コミュニケーション活動を重視する言語教育やプレゼンテーション力の習得に主眼を置く実践学習にとって効果的で、また最新のIT技術が整ったアトリエ的な空間として、手作りのワークショップやシンポジウムの開催に適しています。

STUDIOには、主要な設備として、以下のような機器・機材が装備されていますので、教育を多彩に、多様に、そして楽しく進めることができます。

- ① 授業形態（個人、ペア、グループ、クラス）に対応できる可動式机と椅子
- ② ロールプレイ、ディスカッション、発音矯正練習、研究発表を録音・再生するICレコーダー
- ③ さまざまな学習活動を録画・再生するデジタルビデオカメラ（3脚・ワイヤレスマイク）
- ④ 録画した学習活動を瞬時に視聴し、ディスカッション・評価するための巨大スクリーン2台と個人用ノートパソコン
- ⑤ オンライン学習のためのワイヤレスインターネット接続
- ⑥ オンライン上で対話できるワークスペース

静岡県立大学では、英語教育を強化するために、2009年4月から6名のネイティブスピーカーを特任講師として任用し、全5学部の1年生と2年生の英語コミュニケーション科目を英語で実施しています。今回は、それに加えて、2010年4月の新学期から、1年生の英語コミュニケーション科目は、ネイティブ講師の指導による基礎英語力（General English）の復習と定着やTOEIC学習に重点を置き、さらに2年生の英語コミュニケーション科目は、ESP（English for Specific Purposes）を取り入れ、特にSTUDIOでの対話型学習を積極的に実施することで、学生たちの卒業後のキャリアに役立つ英語の習得を強化する計画です。このような学部横断的に、さらに学部の専門性に応じた、静岡県立大学の英語教育は、国内においてあまり実践例を見ない新しい試みで、成果が期待されます。

※ESP：専門の職業、分野別の目的に添った英語力の向上を目指す英語教育



オープニングセレモニーでのテープカット



デジタルビデオカメラを使って  
ロールプレイの録画



録画したロールプレイをスクリーンで映して  
視聴・ディスカッション・評価

# 産学連携

## 「中部公立3大学新技術説明会」で本学知的財産（研究成果）をPR！

1月19日(火)、JSTホール（東京・市ヶ谷）において、公立3大学（岐阜薬科大学、名古屋市立大学、本学）合同による新技術説明会を開催しました。本説明会は、大学の知的財産を、発明者自身が企業関係者に実用化を展望した技術説明を行い、広く実施企業・研究パートナーを募ることを目的とし、本学からは、薬学部の浅井知浩講師、食品栄養科学部の中山勉教授、生活健康科学研究科の酒井坦教授の3名が発表を行いました。

説明会終了後の個別面談では、企業の方と本学教員とで活発な意見交換も行われ、本学の実践的な研究について大きな関心を持っていただきました。



食品栄養科学部・中山教授による発表



会場風景

## ふじのくに 食と農 健康づくりフェアへの参加

～総合食品開発展への出展と地産地消フォーラムにおいて

木苗学長がパネルディスカッションのコーディネータに～

本学は、2月5日（金）にグランシップで開催された「ふじのくに 食と農 健康づくりフェア」にブース出展しました。

このフェアは、静岡県の多彩な農林水産物（農芸品）を活用し、生産者、加工者、流通販売事業者、研究者が一堂に会し、地産地消、食品産業の振興、健康づくりを切り口とした総合的なイベントを開催することにより県内産業の振興と県民の健康増進を図ることを目的として、静岡県等が開催したものです。

総合食品開発展では、1,340人の来場者を迎え、本学教員の研究による成果品や食品栄養科学部の研究内容を紹介し、地域産業を支援するレベルの高い研究と実践的な産学民官連携活動を通して大学の「知」を地域に還元していることを、食に関係する方々に理解していただく機会となりました。

また、地産地消フォーラムでは、木苗学長が、「地産地消による魅力ある『食ビジネス』の展開」と題したパネルディスカッションのコーディネータとなり、今後の食ビジネスの新たな展開の手がかりを得る意見交換が活発に交わされました。



県大ブースの様子



地産地消フォーラム  
木苗学長がコーディネータとなったパネルディスカッションの様子

## リール政治学院国際交流委員長が学長を表敬訪問

2009年11月25日(木)、本学と交流協定を締結しているフランス・リール政治学院の国際交流委員長パトリック・マルデラ教授、国際交流事務局長カタリナ・ツェルニカ女史が本学を訪れ、木苗学長を表敬訪問しました。

会談では、両校の交流が順調に行われており、今後も両校の交流を深めていくことをお互い確認しました。また、現在、本学に短期交換留学しているジュスティーンヌさんも同席し、本学での楽しい学生生活について語るなど終始和やかな雰囲気の中で行われました。

両校の交流の更なる発展が期待されます。



前列左からツェルニカ女史、マルデラ教授、木苗学長、後列左端がジュスティーンヌさん



## はばたき寄金からのお知らせ

### モスクワ国立国際関係大学派遣 短期交換留学生へ奨学支援金を授与

本学の交流協定校であるモスクワ国立国際関係大学への本年度の短期交換留学生として派遣されることになった国際関係学部3年の藪田茉里さんに奨学支援金が交付されました。

藪田さんは、2月から4月にかけて、同大学に留学しています。



左から木苗学長、藪田さん、島田国際関係学部教授

## 第2回排尿障害モデル動物研究会の開催

薬学部 教授 山田静雄

標記の研究会を2009年11月27日(金)に静岡市で開催しました。

この研究会は、排尿障害のメカニズムの解明と新規治療薬の開発を目的に、泌尿器科学臨床医の先生方のお力添えにより発足し、第1回研究会を2008年の8月29日に静岡市で開催致しました。

今回の研究会では、特別講演として、福井大学医学部の横山修教授に「病態モデルを用いた過活動膀胱の発生メカニズムの解明と薬効評価」と題して、過活動膀胱モデルに関する最新の研究成果をご紹介いただき、教育セミナーとして、札幌医科大学医学部の塚本泰司教授に「前立腺肥大症の治療—肥大前立腺を縮小させる意味は?」と題して、2009年9月に発売された本邦初の5 $\alpha$ 還元酵素阻害剤の臨床的インパクトについてご講演いただきました。また、一般口述発表として、大学や企業の研究者から排尿障害モデルを用いた16演題の興味深い発表がありました。

製薬企業や大学から約100名もの参加者があり、実験の方法論や研究上の疑問点などについて、活発な討論と情報交換の場となり、実りある会となりました。懇親会では、木苗直秀学長より挨拶がありました。第3回は、本年の11月に開催する予定です。本会開催にあたり、大学より学会助成の御支援をいただきましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



多くの参加者で埋め尽くされた会場、  
センチュリーホテル静岡にて

## 「見極めよう！ 科学のウソ・ホント」セミナーを開催

環境科学研究所 助教 岩村 武

環境科学研究所の助教が中心となり活動している環静会かんせいかいの主催で、第一回 しずおか環境を学ぶ会「見極めよう！ 科学のウソ・ホント」と題したセミナーが2009年12月13日(日)に静岡科学館 る・く・るで開催されました。

小学生から保護者までを含む一般の方を対象に、科学の不思議についてデモンストレーションを中心としたセミナーを行い、科学に対する興味を深めてもらいました。セミナーは3部で構成されており、第1部では化学的な原理を用いたマジックを行い、そのタネについて化学の視点から解説が行われました。

第2部では、関西テレビの報道番組『スーパーニュースアンカー』に内藤助教が出演・放映した際の実験映像を使い、ウイルス感染予防のウソ・ホントについての話と実験が行われました。

第3部では、メトロノームを用いて体内リズムが外部環境と同調していく様子を、さらにサーモグラフィーを使って身の回りの温度変化をそれぞれ観察してもらいました。セミナー終了後には、高校生を対象とした体験実験が行われました。この体験実験には、木苗学長も参加し、セミナーで見てもらった様々な実験に加え、ガイガーカウンターを用いて自然界に存在する放射性鉍物を見分ける実験を通して、高校生の方に科学に対する理解を深めてもらいました。



体験実験の様子

## 研究助成採択

### ■平成21年度厚生労働科学研究費補助金採択実績

< 本学教員が研究代表者である研究事業 >

所属名	職名	氏名	研究事業名・研究課題名	区分
薬学部	講師	浅井 知浩	研究事業名：医療機器開発推進研究事業 研究課題名：RNA創薬を支援するバイオイメージング技術の確立	継続
食品栄養科学部	客員教授	米谷 民雄	研究事業名：食品の安心・安全確保推進研究事業 研究課題名：食品中残留農薬等の汚染実態把握と急性暴露評価に関する研究	継続
国際関係学部	教授	石川 准	研究事業名：感覚器障害研究事業 研究課題名：多機能高精度自動点訳エンジンの開発	継続
経営情報学部	教授	小山 秀夫	研究事業名：長寿科学総合研究事業 研究課題名：介護保険施設におけるマネジメント理論の展開に関する実証的研究	継続
経営情報学部	教授	小山 秀夫	研究事業名：政策科学総合研究事業 研究課題名：医療機関における療養病床転換モデルの具体的施策に関する研究	新規
環境科学研究所	教授	国包 章一	研究事業名：地球規模保健課題推進研究事業 研究課題名：水供給分野の国際協力における総合援助手法に関する研究	新規

< 他機関の研究者が研究代表者である研究事業 >

所属名	職名	氏名	研究事業名・研究課題名	区分
薬学部	教授	奥 直人	研究事業名：化学物質リスク研究事業 研究課題名：ナノマテリアルの健康影響評価手法の総合的開発および体内動態を含む基礎的有害性情報の集積に関する研究	新規
薬学部	教授	出川 雅邦	研究事業名：食品の安心・安全確保推進研究事業 研究課題名：食品中の複数の化学物質による健康影響に関する調査研究	継続
薬学部	教授	豊岡 利正	研究事業名：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 研究課題名：違法ドラッグの危害影響予測手法と分析に関する研究	新規
薬学部	教授	森本 達也	研究事業名：政策創薬総合研究事業 研究課題名：内因性幹細胞の動因・生着・分化と心筋細胞肥大の情報伝達を標的とした新規心不全治療法に係る調査研究	継続
薬学部	教授	山田 浩	研究事業名：食品の安心・安全確保推進 研究課題名：健康食品の情報提供システム体制の構築と安全性確保に関する研究	新規
薬学部	講師	浅井 知浩	研究事業名：医療機器開発推進研究事業 研究課題名：ナノサイズリポソームを用いた急性心筋梗塞治療法の開発	継続
食品栄養科学部	教授	合田 敏尚	研究事業名：長寿科学総合研究事業 研究課題名：高齢者の経口摂取の維持ならびに栄養ケア・マネジメントの活用に関する研究	新規
食品栄養科学部	教授	大島 寛史	研究事業名：政策創薬総合研究事業 研究課題名：活性酸素・窒素酸化物による核酸・タンパク質の装飾に対する新規トコリエノール安定化体の影響	継続
食品栄養科学部	教授	大橋 典男	研究事業名：新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業 研究課題名：リケッチアを中心としたダニ媒介性細菌感染症の総合的対策に関する研究	新規
食品栄養科学部	准教授	増田 修一	研究事業名：化学物質リスク研究事業 研究課題名：ナノマテリアルの遺伝毒性及び発がん性に関する研究	継続
経営情報学部	准教授	藤澤 由和	研究事業名：地域医療基盤開発推進研究事業 研究課題名：医療の発展と患者の保護をめぐる倫理・法の現代的課題に関する研究	継続
経営情報学部	准教授	藤澤 由和	研究事業名：政策科学総合研究事業 研究課題名：医療機関における療養病床転換モデルの具体的施策に関する研究	新規
経営情報学部	講師	東野 定律	研究事業名：子ども家庭総合研究事業 研究課題名：要保護児童における被虐待による問題や障害等の類型化された状態像とケアの必要量の相互関連に関する研究	継続
経営情報学部	講師	東野 定律	研究事業名：長寿科学総合研究事業 研究課題名：在宅および施設における要介護・要支援高齢者に必要な介護サービス量を推定するモデルの開発に関する研究	継続
看護学部	准教授	奥原 秀盛	研究事業名：がん臨床研究事業 研究課題名：WEB版がんよろず相談システムの構築と活用に関する研究	継続
環境科学研究所	教授	国包 章一	研究事業名：健康安全・危機管理対策総合研究事業 研究課題名：飲料水の水質リスク管理に関する総合的研究	継続

■平成21年度厚生労働省がん研究助成金採択実績

< 本学教員が研究代表者である研究事業 >

所属名	職名	氏名	研究事業名・研究課題名	区分
食品栄養科学部	教授	大島 寛史	環境化学発がん物質の曝露評価法の開発と発がんリスク評価に関する研究	新規

< 他機関の研究者が研究代表者である研究事業 >

所属名	職名	氏名	研究事業名・研究課題名	区分
薬学部	教授	奥 直人	がん組織の特異性を利用したドラッグデリバリーシステム（DDS）薬剤の基礎的・臨床的開発に関する研究	新規
薬学部	講師	岩本 憲人	新規発がん要因の検索とヒト発がんへの関与に関する研究	継続
食品栄養科学部	准教授	増田 修一	新規発がん要因の検索とヒト発がんへの関与に関する研究	継続

■その他の研究助成採択実績 ※全て研究代表者です。

財水谷糖質科学振興財団

研究者：薬学部 教授 鈴木 隆  
研究課題：Role of sulfatide in replication of influenza A virus

財浜松科学技術研究振興会

研究者：薬学部 教授 森本達也  
研究課題：静岡特産温州みかん抽出物を用いた心不全治療の開発  
研究者：薬学部 准教授 渡辺賢二  
研究課題：有用天然物の生合成遺伝子発現による環境低負荷型分子創製  
研究者：薬学部 講師 江木正浩  
研究課題：高活性な固定化ヘテロポリ酸の開発と環境低負荷プロセスへの応用

財病態代謝研究会

研究者：薬学部 准教授 渡辺賢二  
研究課題：正合成遺伝子の大腸菌発現による抗腫瘍生理活性物質サフラマイシンの効率的合成の研究

内藤記念科学振興財団

研究者：食品栄養科学部 助教 望月和樹  
研究課題：食品因子によるエピジェネティックメモリーの可塑性と代謝性疾患発症機構との関連

静岡県農業法人協会

研究者：経営情報学部 教授 岩崎邦彦  
研究課題：静岡県農業法人協会会員の協会事業に関する意向調査

教員の人事、新規客員教授の紹介

■教員の人事

●採用 (平成22年1月1日付け)		●退職 (平成22年1月31日付け)	
浅川 倫宏	薬学部 助教	脇本 敏幸	薬学部 講師

■客員教授

氏名	所属・職名	期間
池谷 直樹	国立大学法人静岡大学 保健管理センター所長・教授	H22.4.1～H25.3.31

研究成果が学会誌の表紙に

日本農芸化学会の学会誌である「化学と生物」の2010年1月号に、食品栄養科学部食品分析化学研究室・熊澤茂則准教授および生活健康科学研究科老化制御研究室・太田敏郎助教他が執筆した「沖縄産プロポリスの起源植物」と題する総説記事が掲載され、その研究成果（植物とミツバチの写真）が表紙を飾りました。この記事は、同様に表紙に写真が載った「現代化学」（発行：東京化学同人）2009年6月号の続編にあたります。





# 活躍する卒業生・修了生

～薬学部・薬学研究科編～

## ファルマバレープロジェクト進行中

2002年3月薬学部卒業

財しずおか産業創造機構ファルマバレーセンター勤務（静岡県より派遣）内田恭之

静岡を、世界一の健康長寿県にする。そんな雄大な目的をめざし推進されているのがファルマバレープロジェクトです。ファルマバレープロジェクトでは、静岡県立静岡がんセンターや国立遺伝学研究所などの研究機関が中核となり、これらの機関と静岡県東部地域の医薬品・医療機器産業などの幅広い研究関連産業等が連携し地域と一体となり、「健康長寿世界一」をめざすための研究開発や各種事業が進められています。このプロジェクトの推進機関として静岡がんセンター研究所内に「ファルマバレーセンター」が設置されています。

ファルマバレーセンターでは、「健康長寿世界一」実現のために、産学連携の促進・企業誘致・創薬探索や治験推進など、さまざまな切り口で事業を行っており、静岡県立大学とコラボレーションしている事業もあります。現在、私を含め、3人の県立大学の卒業生がファルマバレーセンターで働いています。

私の所属する治験推進部では、静岡県内の29医療機関でネットワーク（静岡県治験ネットワーク）を形成し、治験を推進するための各種活動を行っています。「治験」という言葉は、なじみの薄い言葉かもしれませんが、「健康な方や患者さんに『薬の候補』を使っていただき、広く患者さんに使われるようになる前に効果や安全性に関する情報を集めるために行う試験」のことをいいます。静岡県内でも数多くの治験が実施されるようになってきましたが、新しい薬を早く患者さんへ届けるためには更なる治験の推進が必要です。

私の具体的な仕事内容としては、製薬企業へ治験ネットワークを売り込む営業活動や治験に関わる方を対象としたセミナーの企画・開催、臨床試験の実施支援など治験ネットワークをより機能的にするために、多岐にわたる仕事を担当させてもらい忙しい毎日を過ごしています。

行政の仕事のなかには、「ネットワーク形成」や「連携強化」などといったことを目的に各種事業が行われることがあります。それを実現することは簡単なことではありません。関係者の方に「ネットワークを形成して（もしくは連携を強化して）、地

域や事業を盛りたてていきたいと思います。」と声を掛けるだけではなにも変わりません。理屈だけでは人は動きません。相手の立場を理解しさまざまな事に配慮しつつ、一緒になって汗をかかないと人の心を動かすことはできません。

一方、多くの人の力が1つにまとまったときには、非常に大きな仕事・満足度の高い仕事の実現可能になると実感しています。まるで個々の力が「足し算」ではなく「かけ算」になるかのようです。

大学を卒業し、社会人となり8年。毎日忙しく仕事をするなかで、困難な事例にぶつかり多くの失敗を経験しながらも、日々前向きに一生懸命仕事に取り組んでいるのは、仕事場の仲間や家族の支えがあったことです。また、仕事の取引先で大学の同期や先輩・後輩にお会いすることも多く、人とのつながりの大切さを再認識しています。ファルマバレープロジェクトのような事業は、多くの方の理解と協力がないと進める事ができません。多くの方がこのプロジェクトを通じてつながり、大きな力を発揮できるよう今後も努力していきたいと考えています。

仕事場から見える富士山は、今日も雄大で美しく、元気をもらえます。この富士山麓地域が、世界へ健康長寿を発信する地域になる。そんな夢のようなことを現実にするファルマバレープロジェクトが静岡で着実に進行中です。



県立大学卒業生3人と（筆者中央）



## 東京理科大学薬学部より近況報告

私は、2006年3月に学位を取得後、東京理科大学薬学部放射線生命科学教室で、助教として4年間働いています。こちらでは、教授と助教の二人で一つの研究室を運営します。私の仕事は、学部運営のための各種学内業務のほか、3年生の放射性医薬品学実習、薬理学実習、そして卒業研究生・大学院生約20名の研究指導を担当しています。研究指導は、よい成果が得られないと学生からの信頼を失います。そのため指導の一回一回が真剣勝負で、教員になって研究指導の難しさと怖さ、そして面白さを実感しています。

今、私は、放射線の生体への影響を研究する放射線生物学（生物物理学）を研究しています。大学の放射化学の教科書では、放射線による生体影響は、直接的エネルギー付与と水電離による活性酸素種生成による影響だと習います。しかし、私は、放射線生体影響の原因はそれだけではないと思いました。なぜなら、細胞が物理的的刺激を受けた場合、細胞はATPを放出して周りの細胞にプリン受容体を介して情報を伝える現象（purinergic signaling）があることを大学院時代（現衛生分子毒性学講座に所属）の研究で学んでいたからです。

しかし、生物物理学分野の範疇の放射線生物学者は、異分野である薬学分野に属するプリン受容体研究をしている人は誰もいませんでした。一方、プリン受容体を研究している薬理学者は、誰も放射線生体影響を研究していませんでした。そのため、面白いことに放射線生体影響におけるATP受容体の関与を研究している人は世界中で誰もいないということを知りました。

そこで、放射線生物学（生物物理学）の研究に、プリン受容体の研究（薬理学）のエッセンスを注入した世界で誰も行っていない新規融合領域の研究を開始しました。その結果、最近、放射線刺激によって、細胞外へATPなどのヌクレオチドが放出され、放出されたATP等が細胞膜上のプリン受容体を活性化させる細胞間情報伝達が放射線生体影響に深く関わっていることを発見し、米国放射線影響学会誌に新理論「Radiation-Induced Purinergic Signaling (RIP S)」(放射線誘発プリン受容体介在型細胞間情報伝達)を提唱しました。この現象は、がん細胞の放射線ダメージからの回復や放射線による癌転移促進・血管新生に関わっている可能性が高い

### 2006年3月大学院薬学研究科（博士後期課程）修了 東京理科大学薬学部 助教 月本光俊

ため、より効率の良い副作用の少ない放射線がん治療への応用を目指して現在研究中です。

大学の研究者の面白さの一つに、自由な発想で新しい概念を作り出し、教科書（常識）を塗り替えることがあります。また、新しい発見は、新しい治療薬の開発につながり、結果として世界中の患者を救える可能性を持っています。ただ、自分は、田舎育ちなので、実際には治療に対する興味よりも、単純に、「生き物が好き！生命ってすごい！」という生命に対する尽きない興味が研究の原動力だと思います。この瞬間も少しずつ世界中で生命の謎が明らかにされていますが、宇宙の謎と同じようにいつまでも明らかにし尽くせないロマンのようなものを生命科学的研究にも感じます。

現在の私の研究生活の根幹には、厳しく正しい教育を受けた県大の大学・大学院時代があるのは間違いありません。現在、県大薬学部は、当時より研究環境がより整備され、数多くの一流の先生方から教育を受けることができ、研究の基礎を学ぶには大変素晴らしい環境だと思います。大学院生活を通して、研究の面白さ・奥深さに魅了された方は、非常に陰しい道であると覚悟した上で研究者の道も一度考えてみてはいかがでしょうか？今後、研究者を志した多くの県大生と出会うことを楽しみにしております。



国際学会にてイギリス、オーストラリア、スペインの若手研究者仲間とともに（著者は右から二人目）

★次回は、食品栄養科学部・生活健康科学研究科編を掲載します。

## 研究者を目指して

※研究者として国内外で活躍する卒業生・修了生を紹介するコーナーです。

### 海外での研究生活を経て思うこと

2004年3月大学院生活健康科学研究科（博士後期課程）修了  
松山大学薬学部 助教 奥山 聡

みなさんこんにちは。私は、2004年3月に大学院生活健康科学研究科博士課程を修了しました。その後、カナダのSaskatchewan大学で博士研究員、アメリカのNebraska大学Medical Centerでの博士研究員を経て、2009年4月より松山大学薬学部・薬理学研究室の助教として勤めています。

Saskatchewan大学のあるSaskatoon市は、カナダ中部、360度見渡す限りの大平原の中にあり、冬は時折 $-30^{\circ}\text{C}$ 以下（体感気温は $-40^{\circ}\text{C}$ ！）になりますが、自然が非常にきれいなところでした。私は、大学でCollege of Pharmacy and Nutritionに所属しており、低タンパク質栄養が脳卒中に与える影響について研究を行ってきました。研究室は、栄養学科でしたが、セミナーや研究を通じて薬学科の研究室とつながりを持っており、薬学と栄養学が密接に関係しているところは、静岡県立大学を思い出させることでありました。また、大学付属の語学学校で、就職を経てから語学留学をしている県立大学国際関係学部の卒業生とも知り合い、県立大学出身者の活躍とともに、世の中の狭さを実感致しました。アメリカでは、中西部のNebraska州Omaha市に住んでいましたが、Omaha市と静岡市は姉妹都市で、静岡には非常に縁のある土地でした。ここで私は医学部のDepartment of Pharmacology and Experimental Neuroscienceに在籍し、アルツハイマー病の病態解明ならびに治療薬探索の研究を行っていました。

このように、私は4年間、北米の大学に勤め、様々なことを知り、体験することが出来ました。中でも特に印象に残ったのは、海外の研究施設の組織力の大きさでした。幅広い研究が行える体制と環境が整っているだけでなく、博士研究員やテクニシャンなどのリサーチスタッフも多くいて、仕事の専門化が図られていました。しかし、その分競争も激しく、各々が切磋琢磨することでレベルが高く保たれていました。このように北米の大学のパワーを感じる一方で、私がそれまでに日本で学んだ知識や技術、また日本の設備レベルも非常に高いものであったことを実感しました。これは非常に嬉しいことで、誇るべきこ

とだと思います。国内にいと海外の状況など知る機会も少ないですが、海外に赴き色々なことを実際に自分の目で見て、直に感じる事ができたのは大きな財産になりました。

研究というのは、そこに所属している研究者すべてが、同じ目標を持って前進していくという素晴らしい仕事だと感じています。世界の研究者と一緒に仕事をするという事は、言語や考え方も違ったりと、時々コミュニケーションに苦労することもあります。重要なのは、その中で自分がこれまでに獲得してきた能力や経験をどのように発揮出来るかということだと思っています。今は、また新しいテーマで研究が進行中ですが、これまでに国内外で携わってきた研究から得られた経験の全てがこれからも大いに役立つと考えています。今後も日本で、色々なことにアンテナを張り巡らしながら、様々な研究に取り組み、研鑽を積んでいきたいと思っています。



ラボのメンバーと（筆者は一番左）、  
University of Nebraska Medical Center, USA



ラボのある建物、University of Saskatchewan, CANADA

## 受賞

### ■第31回サントリー学芸賞を受賞

国際関係学部の松森奈津子講師は、2009年12月10日(木)、第31回サントリー学芸賞(思想・歴史部門)を受賞しました。本賞は、「前年1月以降に出版された著作物を対象に選考し、毎年、広く社会と文化を考える、独創的で優れた研究・評論活動をされた方に対し贈呈」(サントリー文化財団)するもので、これまでに青木保、石川九楊、猪口孝、塩野七生、養老孟司各氏などが受賞しています。今回の対象作品は、『野蛮から秩序へ——インディアス問題とサラマンカ学派』(名古屋大学出版会)で、その内容紹介は、「はばたき」第110号18頁に掲載されています。



松森奈津子講師(前列右から二人目)

### ■国際ポリフェノール会議でTravel Awardを受賞

大学院生活健康科学研究科博士前期課程(食品分析化学研究室)1年の幡野愛さんと2年の岡村直樹さんは、2009年12月7日(月)~11日(金)に英国Yorkshire州Harrogateで開催された4th International Conference on Polyphenols and Health(第4回ポリフェノールと健康国際会議)でTravel Awardを受賞しました。

この賞は、優秀な発表を行った学生または若い研究者に贈られる賞であり、幡野さんの発表は、「Study on the antioxidant activity of red propolis」、岡村さんの発表は、「Study of angiogenesis inhibition by flavonoids using the Chorioallantoic Membrane (CAM) assay」で、両者とも国内外の研究者から高い評価を受けました。



幡野愛さん(左側)と岡村直樹さん

### ■第10回歯車賞の受賞

私たち日本語支援サークル「ニョッキ☆」は、2009年12月12日(土)、静岡西ロータリークラブから「第10回歯車賞」の表彰を受けました。「歯車賞」とは、地域社会における、特に青少年の育成に有益な諸活動を行なう団体や個人の活動に贈られる賞です。写真はその授賞式で、「ニョッキ☆」の活動を紹介するプレゼンをしているところです。

「ニョッキ☆」は、静岡市内にある小中学校に在籍する、外国人児童生徒に対して日本語と教科の勉強のお手伝いをするボランティアサークルです。今回、ボランティア先のうちの一つの学校の先生から推薦をいただき、受賞することができました。

相手は子どもなので、すぐ遊びだしてしまったりして、思うようにボランティアが出来ないことも多々ありますが、このような賞をいただいて、私たちの活動が子どもたちの役に立っているのだという自信に繋がりました。これからも、子どもたちのためにボランティアを続けたいと思います。(国際関係学部3年 遠藤ゆか)



授賞式で「ニョッキ☆」の活動を紹介

## ● 教員の著書紹介 ●

### 「アメリカの世界戦略と国際秩序——覇権、核兵器、RMA」

ミネルヴァ書房 全368頁 2010年2月刊行 定価6,500円(税別)

国際関係学部 教授 梅本哲也

本書は冷戦終結から21世紀初頭に至る国際秩序の在り方について、その主軸となってきた米国の世界戦略(およびそれを巡る議論)に焦点を合わせて分析、展望したものです。本書の構成は以下の通りです。

- はじめに
- 第I部 現代国際秩序の諸相(第1章 国際秩序とは何か、第2章 米ソ双極秩序の実態、第3章 唯一の大国としての米国、第4章 単極秩序の現状と展望)
- 第II部 米国世界戦略の展開(第5章 卓越戦略での合意、第6章 ブッシュ革命の実相、第7章 代替路線の摸索)
- 第III部 米国の国防関連政策(第8章 核兵器政策の推移、第9章 国防変革と在外米軍、第10章 ミサイル防衛の軌跡、第11章 不拡散政策の変容)
- 終章 国際秩序、米国、そして日本の針路





# 図書館だより

図書館では、平成21年度年度計画に基づき、親しみやすく魅力ある図書館運営をめざし、以下のような事業を展開してきました。

## 1 教育・研究実施体制等の整備

### (1) 教育環境の整備

- ・県大、短大の資料の共有化を図り、2キャンパス間ネットワークが活用され、相互貸借が増加し資料の有効活用を行っています。
- ・学務情報システム（Web学生サービス支援システム）の更新に伴い、職員証・学生証で図書館が利用できるようになりました。
- ・各学部発行の紀要等を電子化し、図書館ホームページ「研究紀要」のサイトから利用できるようになりました。

### (2) 学習・研究支援

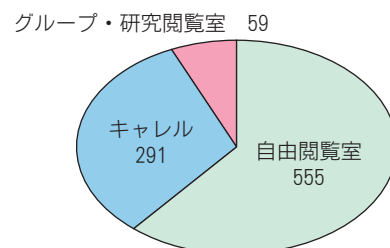
- ・学術文献資料と電子媒体資料の系統的整備を図り、約9,000タイトルの電子ジャーナルが、学内のネットワークを通じ利用できるようになりました。
- ・シラバスで紹介された図書や教員指定図書などの収集・整備に努めるとともに、学生の図書館及び情報活用能力の向上を図るために、各種講座や学内の行事にあわせた資料展示などを行いました。講座に参加された方からは、「今まで使ったことがなかった資料の検索方法が分かった」「雑誌の調べ方がよく分からなかったので、とても助かりました」などの感想をいただきました。
- ・「次世代キャンパスに向けた携帯端末に関する研究」事業に協力し、無線LANを図書館内に設置し、無線LANが利用できるノートパソコン4台の貸出サービスを4月から始めました。パソコンは、レポートやゼミの発表資料の作成などに活用され、自由閲覧室、キャレル、グループ閲覧室、研究閲覧室で利用されています。
- ・雑誌の「一夜貸し」の返却期限を、翌開館日の10：40まで延長し、利便性を図りました。



外部講師によるデータベース講習会

### ノートパソコン貸出回数

貸出総数：905回  
平成21年4月～平成22年1月



## 2 地域社会との連携

- ・県民への図書館開放を引き続き行うと共に、短期大学部と連携して医療機関の関係者に向けて講習会を実施するなど、学外者に対して図書館の有効活用を図りました。
- ・大学の防災拠点としての役割として、防災関連図書の充実に努めると共に、「静岡県防災士養成講座」開講にあわせ、当大学所蔵の防災資料の目録情報を参加者に提供するなど、資料の利用促進を図りました。
- ・県立美術館、県立中央図書館、舞台芸術センターの事業に関する展示を行い、連携を深めることができました。

## 3 その他の事業について

### (1) 人権関係資料の充実

ハラスメントや人権に関する図書の充実に努めると共に、学内のセクシュアル・ハラスメント講演会では、図書館所蔵の関係資料展示や、資料リストを作成し配布しました。

### (2) 「岡村昭彦文庫」資料の活用

剣祭において、関係機関と連携し岡村昭彦のヴェトナム戦争などの報道写真や文庫の資料展示を行いました。また、「日本死の臨床研究会」年次大会では、文庫の資料展示を行い、多くのみなさまに見ていただくことができました。詳しくは、広報「はばたき」112号を参照ください。



岡村昭彦の写真と文庫資料展示風景

## 《 本学教員からの寄贈著書 》

図書館では、先生方に著作の寄贈をお願いしています。寄贈していただいた資料は、図書館2階自由閲覧室に、「教員著書」として配架してあります。「教員著書」も一般の図書と同じように借りることができますので、先生方の最新の研究成果に触れてみてください。

平成21年1月から平成22年2月10日までに寄贈していただいた資料は次のとおりです。

・円谷由子先生（食品栄養科学部）

「食生活のバランスの悪さを理解してもらおう活動」常賀由子著（『海を渡った栄養士たち：青年海外協力隊栄養士40年の活動記録』）333.8/Se 19

・金澤寛明先生（看護学部）

『ビジュアル・アナトミー カラー人体図鑑』ジェーン・ダ・バーグ編 金澤寛明訳 491.1/D 52

## シリーズ 私の1冊の本

図書館では、「私の1冊」と題して、先生方が今までに読んで、感動し心に残った本をシリーズで紹介しています。紹介された図書は、県立大学附属図書館の書架に配架してありますので、まだ読まれていない方は是非この機会に読んでみてください。

## 環境科学研究所 助教 榎原啓之

紹介図書名：ゼフィラム

著者名：榎周平

出版社名：朝日新聞社出版

I S B N : 978-4-02-250677-1

図書館所蔵：913.6/N 78



「私の一冊」への執筆依頼を受けたのが昨年の秋頃。放置していた小生が悪いのではあるが、気づけば締切期日が迫っていた。そんな中、「私の一冊」用にと読み始めた本（デイヴィッド・パーカー著の胎内で成人病は始まっている）の内容は…確かに興味深く、最後まで飽きることはなかったが、私自身考えるところがあり、「折角だけど、これは専門分野が近い学生たちに、講義か何かの機会に紹介することにしよう」と、方向転換することにした。そこで、読みやすく、かつ教養書にもなりうる図書として（相応しいか否かは、とりあえず置いといて）、榎周平氏の『ゼフィラム』を紹介したいと思う。

新書を購入するとき、よほどのご最良作家でもなければ、タイトルを見て、手に取り、そして最初に目にするのは“帯”ではなからうか。本書の帯には、

「電気自動車は本当に究極のエコカーなのか!？」

とあった。小生、所属が環境科学研究所であるため、このような文言には滅法弱い。移動時間の暇つぶし用にと、購入し早速読み始めたが、中々に面白かった。

物語は、米国でオバマ政権が始まる直前の時期、日本自動車工業（架空）が社運をかけて開発したハイブリッド車を、どうすればインパクト強く市場に送り出すことができるのか、との問題提起から幕が上がる。今やなんでも新しいものには“エコ”、とにかくエコ。“環境に優しい”が時代のキーワード。では、機能面で類似した車種が居並ぶ自動車業界で、この2つのキーワードを前面に押し出して旗振れば、はたして競合他社の一步先を進めるのか？答えは否。もはや、環境やエコは考えて、そして取り組むことが当たり前。ハイブリッドや低燃費なんて言葉も、売りにはならない、新鮮実がない。では、どうすればよいのか…環境に優しい車の開発を目指した取り組みが展開されていく。

企業がベースの物語なので、利益最優先な取り組みへと進んでいくのは仕方ないが、環境問題へ取り組む意識には、共感を覚えた。もちろん、「小説だからね、そんなに上手いこと話が進むんだよ」と思われる方が多いと思う。そして、物語の結末にも賛否両論あると思う。しかしながら、至る所に出てくる環境問題に関連した話題は、よく調べられており（と思う）、特にブラジルでの森林伐採—サトウキビ・バイオエタノールに関する件は、現在、現実を生じている一つの環境問題を考えるための良い話題提供となるだろう。また、「ブラジルでは本当にそんな現状が起きているのだろうか？」との疑念を抱き、私のようにネットサーフィンを始められる方もおられると思う。このような背景から、電気自動車やハイブリッド車といった近年注目されている環境への取り組みを題材にしている、そしてちょっとした空き時間に気軽に読める本書を「私の一冊」としてお勧めしたい。

# 未来への選択

## ～環境イベント開催～

WPA S～World Peace from Asian Smile～ 河村優子（国際関係学部4年）

これから先、私たちにはたくさんの選択〔Choice〕があります。そのひとつひとつの選択が、私たちの未来をつくっていきます。持続可能な未来に向けてどんな選択をしていったら良いのか。そんな〔未来への選択〕を考えるきっかけとなったら、と思い、この「Choice for the future～海からのメッセージ～」というイベントを企画しました。

ゲストには、環境・経済・平和など様々な活動にかかわり、ap bank等のNPOバンク推進にとりくむ田中優さんと、海の変化を肌で感じ、発信し続けるプロサーファーの木下デヴィッドさん、ナビゲーターには、静岡市議会議員の宮沢けいすけさんを迎えました。木下デヴィッドさんは、「現状を変えたい、誰もが安心して楽しめる海であってほしい」という思いから活動を続けてられています。疑問に思ったらすぐ調べて動く、という行動力には驚きとともに勇気をもらいました。田中優さんは、原子力発電のリスクと自然エネルギーの可能性をわかりやすく説明してくれました。ショッキングな事実もありましたが、明日からできる具体策の提案で、私たちの選択で変えていける未来をイメージすることができました。

1月13日(水)の当日は、寒い中190人もの方が来場してくれました。今回のイベントは、来てくれたお客さん、素敵なゲスト、準備や宣伝を手伝ってもらった方々、たくさんの方のおかげで成功のうちに終わることができました。本当にありがとうございました。



たくさんの方が来場してくれました

## 2010年開学記念行事開催のお知らせ

開学記念行事実行委員会

4月23日(金)に開学記念行事を行います。教職員、学生の皆さん、奮ってご参加ください。

### 第1部 運動会

9:20 受付開始 県大グラウンドに集合（雨天時 体育館）

### 第2部 川勝知事講演、留学生等によるシンポジウム

15:00 大講堂 ※保護者の方も、ぜひご来場ください。

### 第3部 はばたきのつどい（交流会）

17:30（予定） 学生ホール

会費 教職員2,000円（前売り券を販売） 学生 500円（当日会場で徴収）

※第1部、2部ともに参加した学生は無料！

## ニュース&トピックスを公式サイトへ！

教職員・学生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動など様々な情報について、県大公式サイトへの掲載を是非お願いします。また、はばたきへの寄稿もお待ちしております。大歓迎します。

公式サイトへの掲載は、各部局の公式サイト担当者へ依頼してください（不明な場合は、広報室までお問い合わせください）。

はばたき寄稿は、教育研究推進部・広報室（はばたき棟3階）までお願いします。

E-mail:koho@u-shizuoka-ken.ac.jp

発行：広報委員会 お問い合わせ先：静岡県立大学事務局広報室（TEL 054-264-5130）

静岡県立大学ホームページアドレス：<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>